

群飼に対応する母豚給餌システム

Swine Extension & Consulting (スワイン・エクステンション&コンサルティング)

獣医師・獣医学博士 **大竹 聡**
satoshiotake@hotmail.co.jp

はじめに

動物福祉(アニマルウェルフェア)は現在のアメリカ養豚業界が取り組んでいる大きな課題の1つです。その動物福祉のなかで最も生産性に直接的影響を及ぼすのは、妊娠ストールの使用制限でしょう。既にカリフォルニア州などでは妊娠ストールの全面使用禁止が州の法令として通ってしまっています。幸いにして、アメリカ養豚の稼ぎ頭である中西部(アイオワ・ミネソタなど)にはまだその波は来ていませんが、今後どうなってくるのかは誰にも分かりません。そのような事態になってから慌てて対策を立てては、「とき既に遅し」なわけで、アメリカの養豚生産者団体(NPB)や民間企業では今からその対策の研究・現場検証を始めています。

妊娠ストールが禁止になった場合の母豚管理で最大の問題となるのは、「群飼に対応する母豚給餌システムをどうするか?」という点です。日本でもおなじみのジョセフ・コナー先生のカーテージ・ベテリナリー・サービス(CVS)でも1~2年ほど前からその問題について取り組んでおり、つい先月筆者も当クリニックにて個人研修してきたばかりです(研修のメイン目的は他にありましたが)。また、奇しくも、アメリカ養豚業界誌 National Hog Farmer の最新号(July 15, 2009)に CVS の母豚給餌システムの現場試験についての記事が掲載されていました。今回は、その記事の内容と筆者が直接見聞きしてきたことを合わせて、群飼に対応する母豚給餌システムについてアップデートさせていただきたいと思います。

ドロップ・フィーディング・システム

1つめのパターンは、ドロップ・フィーディング・システムと呼ばれるものです。種付け時と種付け後30日間はストール飼養ですが、分娩舎に移動するまでずっと群飼です。この農場では1豚房当たり10頭単位で群飼していました(母豚2600頭のGP繁殖農場)。豚房には「えさ食い場所」が設けられており、収容豚数と同じ数の飼料パイプ(つまり10本)から決まった時間に飼料が落ちてきます。飼料が落ちてくる場所にはそれぞれ左右に間仕切りがあり、10頭全頭が

同時に飼料にありつける仕組みになっています。

利点は、まず安価であること(特別な機器が必要ない)。さらに、ギルトをトレーニングする必要がないことです。逆に欠点としては、母豚の個体当たりで給餌量を調整することができない点です。1群=10頭を単位として飼料を調整しなければなりません。

ESF(エレクトリック・サウ・フィーディング)システム

上述のような「群飼にすると母豚給餌量を個体調整できない」という欠点をカバーするために開発されたのが、もう1つのパターンであるESF(エレクトリック・サウ・フィーディング)システムです。ドロップシステム同様、このシステムも種付け後30日以降から群飼となります。フィーディング・ステーション・マシーンに1頭の母豚が飼料を食べに入ると、自動的にゲートが閉まり、常に1度に1頭の母豚に対して給餌できます。このフィーディング・ステーションが母豚1頭1頭の耳についている電子IDを認識して、その日のその母豚の設定給餌量に合わせた飼料が落ちてくる、という仕組みです。このID認識システムによって、その母豚の履歴を瞬時にスクリーンに出すことも可能です。筆者が体験した農場(総母豚数6000頭のコマーシャル繁殖農場)は1群56頭で管理していました。

従って、このシステムの利点は、群飼でも母豚の個体給餌管理が可能であること。逆に欠点は、この機材の分だけコスト増になることです。さらに、母豚にフィードステーションを通ることを覚えさせるためにギルトの段階でトレーニングをしなければなりません。このプロセスがこのシステムを成功させるための秘訣で、この農場では現在も最も効果的なトレーニングのプロセスを試行錯誤中でした。

群飼による繁殖成績への影響は?

上述のようなシステムを使いこなすことによって、両農場ともに群飼による繁殖成績への悪影響はほとんど見られませんでした(受胎率94~97%、分娩率92~94%、母豚当たり生存産子数12、更新率42~52%)。ただ筆者が体験

した印象だと、群飼状態での発情チェックの作業は思うほど簡単ではなく、また個体治療・ワクチン接種も行いにくくなります。また、群編成のノウハウ（必ずギルト同士で、再編成はしない、など）がないと、闘争の問題が大きく目立ってしまいます。いずれにしても、母豚群飼システムを採用して繁殖成績を落とさないようにするためには、当然それに対応した管理スキルが求められるということでしょう。

まとめ

今回は、アメリカにおける母頭群飼の取り組みについて簡単に紹介しました。現在のアメリカではもちろんストール飼養がダントツで主流ですが、将来のアニマルウェルフェアの流れを見越しての試みである、という背景を汲み取っていたければ幸いです。ただし、日本の農場のなかでは、アニマルウェルフェアという観点からではなく、単純にストールが足りないなどの設備的な問題から「結果的に群飼を採用している」ところは意外と少なくないのが現実ではないでしょう

か。そのような農場では、逆の捉え方ですが、このような母豚給餌テクニックとノウハウを今すぐにも活用できるかもしれません。

© S. Otake

*先方の都合もあり、写真の誌面掲載は今回は控えさせていただきます。ご了承願えますと幸いです。写真も含め詳細情報をご所望の方は改めて下記までご連絡ください。個別に対応させていただきます。

ご依頼先：

Swine Extension & Consulting

(スワイン・エクステンション&コンサルティング) 大竹 聡

(Eメール) satoshiotake@hotmail.co.jp

(電話：アメリカ) 010-1-612-270-6965

(電話：日本) 090-6136-6463

(ファックス) 010-1-612-625-1210

(住所) Swine Disease Eradication Center, Veterinary Population Medicine, University of Minnesota 335b Animal Science / Veterinary Medicine building, 1988 Fitch Avenue, St. Paul, MN 55108 U.S.A.